2011年9月23日

モンゴル日本語教師会　第5回日本語教育シンポジウム

# 自己実現を支える日本語教育

## ―学習者の多様化と日本語教育の方法―

東京学芸大学　教育学部
日本語教育分野　齋藤ひろみ

---

## メニュー

Ⅰ 「日本語を学ぶこと」の意味の多様化
　―日本国内の日本語学習者の場合―
　・生活者としての外国人
　・専門分野で学ぶ留学生
　・外国人児童生徒

Ⅱ 日本語教育の方法
　・アカデミックジャパニーズ
　・活動型日本語教育
　・対話的問題解学習
　・ピア・ラーニング
　・内容重視の日本語教育

Ⅲ 教師の役割：日本語教師養成の新たな課題

---

## Ⅰ 「日本語を学ぶこと」の意味の多様化
## 日本国内の日本語学習者の場合

### 1 日本語学習者の多様化

○ 生活者としての外国人
文化庁「平成22年度国内の日本語教育の概要」
日本語学習者 167,594人　その内一般の施設・団体：117,015人（増加傾向）
★生活のため、日本での職業的キャリア

○ 留学生
独立行政法人日本学生支援機構「H22年度留学生在籍調査」
留学生 141,774人（H22年5月） 大学院・大学在籍者数は、前年比10%前後の増加
文部科学省中央審議会大学部会留学生特別委員会
2020年留学生30万人計画（H20年）
★専門分野の先進性と将来のキャリア

○ 小中高等学校の外国人児童生徒
・文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況などに関する調査（H22年度）」
日本語指導が必要な外国人児童生徒 28,511人（平成22年9月）
ポルトガル語・中国語・フィリピノ語・スペイン語 で 80%
・文部科学省「学校基本調査」
公立学校に在籍する外国人児童生徒 74,214人 （平成22年5月）
★学習参加のための日本語能力の獲得

---

## 2 「生活者としての外国人」に対する日本語教育

文化庁国語分科会日本語教育小委員会（H20-H21）
「生活者としての外国人」が地域社会の一員として社会参加するために必要な日本語教育の体制整備・内容の改善に関する審議がスタート

事業
・『生活者としての外国人』のための日本語教育事業（H19年～）
・「地域日本語教育コーディネータ研修」（H22年～）
調査研究
・「生活者としての外国人」の日本語能力の測定・評価に関する調査研究報告」（H22年3月） 東京外国語大学
・「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」（H22年5月）
・「『同上』活用のためのガイドブック」（H23年1月）
文化審議会国語分科会日本語教育小委員会

---

## 3 留学生に対する日本語教育

○ 文部科学省　留学生施策
・「高等教育機関に進学・在籍する外国人学生の日本語教育に関する検討会議」取り纏め報告書（第一次）
高等教育機関に在籍する留学生の多様なニーズに応じた日本語教育の提供

○ 日本語教育学会等
領域別研究会の発足
・アカデミック・ジャパニーズ研究会（2004年～）
・ビジネス日本語研究会（2010年～）

---

## 4 外国人児童生徒に対する日本語教育

○ 文部科学省施策
・帰国・外国人受け入れ促進事業（H22年～）
　・就学前の外国人児童の初期指導教室の実施
　・就学促進人・支援員の配置及び活用
・外国人児童生徒の総合的な学習支援事業（H22年～）
　日本語指導のガイドラインの作成
　日本語能力測定方法の開発
　日本語指導員のための研修マニュアルの開発
　実践事例の集約と提供(HP:カスタネット)
○ 日本語教育学会　多文化共生における日本語教育研究会
○ 母語・継承語・バイリンガル研究会

「日本語を学ぶこと」の意味の多様化
⇒ 日本語教育の在り方の問い直し

## 日本語を学ぶことで

新たな情報や知識が得られる
日本語によるコミュニケーション力が高まる
⇒
自己教育能力の育成
主体性の形成（アイデンティティ形成と連動）
⇒
自己の世界が広がる
＝日本語教育のねらい

## Ⅱ 日本語教育の方法

### 1 日本語教育の新たな動き

**アカデミック・ジャパニーズ**

＝教養教育
- 学び方を学ぶ
「問題発見解決学習」
- 市民的教養
「社会的な問題へと開かれた関心」

門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズ』

**活動型日本語教育**

＝個人の人格形成に関わる日本語教育
- 自らのアイデンティティを構築・更新
- 学習の主体が学習者自身、問題を発見し解決するのは学習者自身

・・・学習者主体という考え方

細川英雄編著『ことばの教育を実践する・探究する』凡人社

## 対話的問題提起学習（WALLERSTEIN）

アメリカで、移民を対象にした英語教育において発達
- 生活上の困難や課題を扱う
- 社会的能力の獲得を目指す

岡崎・西川（1992）が、自律的学習の方法論として日本語教育に応用
- 自己拡大を目指す
- 学習者自身が問題提起
対話を重ねる
互いが人的リソース

池田玲子・舘岡洋子『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房

**対話のステップ**
―協働的ナラティブのステップ

1）ここでは何が起きていますか。
2）私はここでいったい何を感じていると思いますか。
3）あなたは、その感じ方や問題の設定の仕方についてどう思いますか。
4）もし、自分のことだったら、あなたはどう感じ、行動しますか。
5）あなたの話を聞いて、それに対する私の考えを述べてください。

## 2 ピア・ラーニング

（1）ピア・ラーニングとは
言語を媒介として、ピア（peer:仲間）と協力して学習課題を遂行する学習

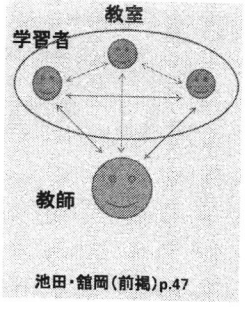
＜考え方＞
・教育は、学習者自身にとっての日本語を学ぶことの意味を重視し、学習者が主体的に学べるように支援すること
・知識は自らが周囲（社会）と相互作用する中で構成するもの（知識を）
・教室は多様な文化・背景・経験を持つ学習者が集まる社会であり、教室は現実の実践の場

＜ピア・ラーニングの2つの目的＞
・作文や読解等の課題を遂行する
・仲間と学ぶことによって、人と人との社会的関係を築く
⇒自分自身を発見する

## （2）ピア・ラーニングの特徴

・学習過程を共有する…知識の伝達ではなく、相互作用によって生み出される学び
・学習過程で何を感じ、考えているかを共有するための「対話」

○リソースの増大
○理解の深化
○社会的関係性構築と動機付け




池田・舘岡（前掲）p.47

## （3）ピア・ラーニングの例（ピア・リーディング）

―ジグソーリーディング―

参加者がそれぞれ異なるテキストを読み、情報を持ち寄って、その情報を統合しながら、理解を深める。

準備：S大学のキャンパスに関する23枚の情報カード

読解活動の進め方：

①各グループでメンバーに数枚ずつ情報カードを配る。
②メンバーは、自分のカードの情報を、口頭で他のメンバーに伝える（カードを見せてはダメ）。
③互いに伝え合った情報を統合して、S大学のキャンパスの地図を描く
④地図ができたら、教師からS大学のキャンパスについての質問を出す。グループごとに、答えを発表する。
⑤グループ毎に、活動について振り返る。

## 3　内容重視（CONTENT-BASED）の日本語教育

（1）「内容重視」の意味
内容を優先し、
日本語は学習のための言語的手段と考える

「内容」×「日本語」のクロスカリキュラム
「教科内容」×「日本語」
⇒「教科と日本語の統合教育」
★子どもたちが「日本語を生活・学習文脈の中で（あるいは関連付けて）学ぶ」場を創る。

## （2）どのような内容を？

前提：
成長過程にある子どもへの日本語教育＝全人教育
「ことば」の獲得・発達　≠言語の知識・技能の獲得
⇔生活世界の広がり（環境との相互作用）
認知的側面の発達（知識・概念の形成、思考力の発達）

子どもを対象としたCBIが選択する「内容」：
・子どもの成長発達にとって意味をもつ
・将来の社会参画・自己実現のために価値がある
・社会事象を読み解き、判断するための力が高まる

## 知的な学び応えのある探求型の活動で

認知的必要度

・子どもたちが
「へん！」「おもしろい！」「なぜ？」
「どうやって？」と感じ、
・見て・尋ねて・調べて・やってみて
新しい発見や気づきを得て
・それを「〇〇さんへ伝える」

認知面と言語面の両方を
活性化し、その発達を促す活動展開

文脈依

低

Cummins の
斎藤が教室で
を

高

## 情報1　「内容」の質的な転換　岡崎(2002)

従来の「内容」：専門や教科の内容…同化では？
⇒「気づき」や「変容」、「自己成長の実感」など、異なる者同士が「やり取りを通して、双方共に、自分分や相手の思考の枠組みに気づいたり、やりとりに触発されたりすることが、この学習の目標
（p.64）

★子どもの場合
認知・母語が発達の途中にあり、メタ認知も十分には発達していない。
→教師の役割がより重要に

## （3）どのように？（CBIの多様な形態）

○シェルター型
メインストリームの教科カリキュラムを少数派言語の子どもに合わせて調整して実施する。
言語面での不十分さを補助する支援を行う。
○補習型
メインストリームの教科カリキュラムに並行して実施する。
その授業に参加できるように、別の教室で言語面での補習を行う。
○テーマ型
少数派の子どものためのプログラムを作成して実施する。
「昆虫」「海」「水」などのテーマを設定し、それを巡る課題を探求する活動を組み合わせ、知識・概念とその活動に参加するための言語知識・技能を養う。

## （4）実践事例

横浜市いちょう小学校
国際教室担当　菊池聡教諭
「ポップコーンをつくろう」
（資料参照）

## Ⅲ 教師の役割
### …日本語教員養成の新たな課題

**1 教師の役割1**

学習者にとっての「日本語を学ぶ意味」を把握し、それに応じて日本語教育の目的を明確化すること

＜そのための視点＞

- 日本語力獲得の社会的意味
- 学習者の個別性・多様性
  - 将来像（キャリア―形成）との関連性
  - 生活・学習環境との関連性
  - 興味・関心との関連性
  - 学習者の発達段階との関連性

考慮しなければならない点

- 日本語教育を実施する条件・環境

**2 教師の役割2**

コース設計に基づき、授業を計画し実施すること

①学習の場をデザインすること

学習者にとっての「日本語を学ぶ意味」に鑑み、具体的な目標を設定して、授業展開（言語活動をどのように配置するか）を決定すること

②授業を運営すること

計画に基づき、学習者との相互作用を通して、状況に応じて計画を調整しながら授業を行うこと

③形成的に学習成果を把握すること

学習のプロセスとその成果を、多様な方法で評価し、次の授業／コースを実施すること

★ヒント：スキャフォールディング…（足場かけ）

**（1） スキャフォールディングとは…理論（心理学）**

＜ヴィゴツキー＞ 社会文化的アプローチ：

学習は社会的な相互作用によって生じる。

「発達の最近接領域」：

子どもが自力で達成できるレベルと大人によるガイドやより力のある仲間との協働によって達成し得るレベルの「幅」

生産的学習は、この「発達の最近接領域」で生じる

＜ブルーナー＞「スキャフォールディング（足場がけ）」：

子どもが課題を容易に達成できるようにするための支援であり、最終的にその子が自力で達成する力をつけるためのプロセス

（2）スキャフォールディングの教育文脈への応用

＜Walqui(2007)＞

**教育文脈における**
**スキャフォールディングの3つの側面**

①カリキュラムの設計・改善（タスク、プロジェクト、クラス活動の種類と配列）

②教室における学習活動を実施するための手順とその支援（①を達成するために）

③相互作用による協働の過程を促進するための補助（②を達成するために）

＜ハモンド（2009）＞

①マクロ・スキャフォールディング

（予め盛り込んでおく支援）

目標設定、活動の配列、参加形態・表現の決定

メッセージの多様性の利用、メタ言語的気づきの促し

②ミクロ・スキャフォールディング

（相互作用的で、偶発性の高い支援）

体験と結びつける、要約する、

学習者の発話を取り入れる、ヒントで引き出す

（3）言語教育（英語学習者への）における
スキャフォールディングのタイプ（WALQUI2007）

①モデルを示す（Modeling）

②既有知識と関連付ける（Bridging）

③文脈化する（Contextualizing）

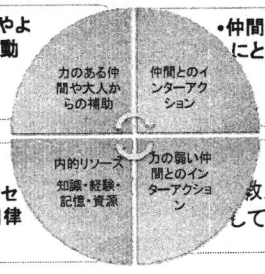
④スキーマを構築する（Schema Building）

⑤テキストを再表現する（Re-presenting Text）

⑥メタ認知を発達させる（Developing metacognition）

## (4)教室内の協働によるスキャフォールディング
## VAN LEIR(2004)の発展型「発達の最近接領域」(ZDP)

- モデリングやより複雑な活動への参加
- 仲間の一人の発達にともない、他のメンバーも発達




- セルフアクセスによる自律的な学習
- 教えることを通して学ぶ

## 参考・引用文献


- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房
- 石井恵理子・齋藤ひろみ・門倉正美・川上郁雄(2007)「年少者日本語教育における「JSLカリキュラム」とリテラシー教育」2007年度日本語教育学会春季大会予稿集
- 岡崎眸(2002)「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人者pp. 49-66
- 小川貴士編著(2007)『日本語教育のフロンティア』くろしお出版
- お茶の水女子大学日本言語文化学研究会編集(2005)『共生時代を生きる日本語教育』凡人者
- 門倉正美・箕井洋一・三宅和子編(2006)『アカデミック・ジャパニーズ』ひつじ書房
- 川上郁雄(2002)「年少者のための日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人者
- 川上郁雄編著(2006)『「移動する子どもたち」と日本語教育』明石書店
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広(2009)『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版
- 舘岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ』東海大学出版会
- 細川英雄編(2008)『ことばの教育を実践する探究する』凡人社
- 細川英雄・蒲谷宏編(2008)『日本語教師のための「活動型」授業の手引き』スリーエーネットワーク
- 齋藤ひろみ・佐藤郡衛・高木光太郎(2005)『JSLカリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク
- 齋藤ひろみ・今澤悦・内田紀子・花島健司(2011)『外国人児童生徒のための支援ガイドブック—子どもたちのライフコースによりそって』凡人社



- Snow & Brinton (1997)*The Content-Based Classroom* ,Addison Wesley Longman,
- Cummins,J. & Swain,M.(1986) *Bilingualism in Education,* LONGMAN
- Chamot,A.U.& O'Malley,J.M.(1994)*THE CALLA HANDBOOK Implementing the Cognitive Academic Language Learning Approach* .ADDISON－WESLEY PUBLISHING COMPANY
- Met,M.(1994)Teaching content through a second language. In F.Genesee (Ed.) *Educating second language children*. Cambridge University
- Walqui,A.(2007)"Scaffolding Instruction for English Language Learners" In Garcia,O. *Bilingual Education. An Introductory Reader.* Multilingual Matters LTD.
- Van Lier, L.(2004) The ecology and Semiotics of language learning. Dordrecht : Kluwer Academic